

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23141

研究課題名（和文）現代ルワンダにおける暴力の記憶の分有と継承に関する人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study on the Sharing and Transmission of Memories of Violence in Contemporary Rwanda

研究代表者

近藤 有希子（Kondo, Yukiko）

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・助教

研究者番号：10847148

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1990年代に凄惨な紛争と虐殺を経験したルワンダにおいて、人びとが「語る」という行為だけには拠らない仕方で、暴力に関わる個別の体験を親密な他者とのあいだに分有し、またそれが若い世代に継承されていく姿を民族誌的な記述を重ねるなかで描き出すことを目的とした。「大人世代の個別の記憶」に関する短期間の現地調査を遂行するとともに、戦後処理をめぐる「語ること」に関する歴史的な経緯の整理や、調査者による暴力の記憶の分有と継承に関する理論的考察をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西欧型の紛争解決の手続きにおいては、「語ること」が真実を同定して合意を促し、歴史を定位するうえで沈黙よりも優位な行為と考えられてきた。他方で沈黙とは、実証主義歴史学では客観的な事実の不在として切り捨てられ、精神医学ではトラウマなどの病的症状としてのみ把握される傾向にあった。本研究ではむしろ、人びとの沈黙や語りえなさの発露としての情動にこそ人びとの応答的な関係性が生じて、個別の記憶が分有し継承される可能性があることを探求したが、それは法制度や自律的な個人に委ねるのではない、人間の共感や応答能力を活かした平和の定着に向けた重要な取り組みである。

研究成果の概要（英文）：This study aimed at examining the ways in which people, who experienced horrific conflicts and genocide in the 1990s in Rwanda, share their individual experiences of violence with others in a way that does not rely solely on verbal expression and how these experiences are passed on to the younger generation through a series of ethnographic research. In addition to conducting a short-term field survey on the individual memories of the adult generation, the project also discussed the historical background of verbal expression regarding postwar processing and theoretical considerations on the sharing and transmission of memories of violence by the researcher.

研究分野：文化人類学

キーワード：暴力の記憶 情動 沈黙 分有 継承 国家の歴史 虐殺生存者 ルワンダ

1. 研究開始当初の背景

ルワンダ共和国では、1990年からの紛争に続き、1994年には多数派のフトゥ (Hutu) のエリート層や「暴漢」集団による、少数派のトゥチ (Tutsi) やフトゥ穏健派に対する虐殺を経験した。虐殺後、現政権は国民の統合と和解の取り組みを実施しており、その一環としてエスニシティを否定した。全国民に様に「ルワンダ人」としてのアイデンティティを付与する一方で、その政策のもとに形成された「国家の歴史」においては、トゥチだけを「生存者」とみなし、フトゥを「加害者」として均質化する力学が存在している (Eltringham, 2004)。そこでは公的な言説には沿わない語りを厳格に排除する仕方において、人びとの記憶の選別と一元化がなされており、紛争の再発が懸念されてもいる (Reyntjens, 2013)。

ところが実際には、村に暮らす大半の人びとが「トゥチが生存者でフトゥが加害者」という「国家の歴史」からは零れ落ちてしまう微妙な記憶の濃淡を有している。凄惨な個人的経験と公的な言説との狭間にあつて、もしくは地域社会の周囲との関係性や個人の被傷性において、大多数の人びとの発話には身構えや「語りえないこと」が往々に現出する。沈黙し、静かに口を閉ざす人びとはいかにともに生きるのか——これが核心となる「問い」である。

2. 研究の目的

本研究では、「語る」という行為だけには拠らない仕方で、紛争と虐殺に関わる個別の特異な体験が親密な他者とのあいだに分有され、またとくにそれが若い世代に継承されていく姿を民族誌的な記述を重ねるなかで描き出すことを目指した。その際、人びとがどのように親密な相手の了解不可能な過去と対峙しており、またその過程で当事者もお表象不可能な暴力の経験を、いかなる形態や信念のもとに次代に継承していくのかについての考察を深めた。

3. 研究の方法

本研究では、研究代表者が2011年より調査を実施してきた、ルワンダ南部州N県の一行政村のK村(141世帯、人口約630人)に暮らす人びとを対象にして、以下三点の課題を明らかにしようとした。

- (1) 大人世代の個別の記憶：一元化された「国家の歴史」が暴力的に創出される一方で、人びとが独自の複雑な体験をそれに従属させたり、放棄、変容させたりしていく様相を描出する。個別の暴力の体験に関する、①理性的な語りと、②情動的に身体に表出する記憶が、それぞれどのような場面でみられ、それに対して周囲がいかに応じるのかを観察する。とくに、家庭内などの親密圏において大人(世代)が子ども(世代)に対峙するとき、かれらの個々の体験がいかなる形態と内容において想起されるのかを検証する。
- (2) 若者世代の「体験」の継承：1994年の虐殺から30年近くが経過し、それを体験していない世代が人口の大半を占めるようになっていく。これまでの調査で、国家から認定された「虐殺生存者」を親にもつ若者たちが、実体験をした親世代以上に詳細でおよそ感情的に、虐殺時の「体験」やそれに至る歴史を研究代表者に向けて語る姿に立ち会ってきた。他方で「虐殺生存者」ではない親をもつ若年層は、相対的に寡黙であることが多い。戦後世代とされる青年層が、紛争や虐殺に関していかなる語りをおこない、それがどのような環境下で培われてきたのかを、①かれらの家族構成や、②教育の現場に着目して調査を実施する。
- (3) 安全と平和、共生の論理：研究代表者は人びとが「いまのルワンダには、セキュリティ≒安全 (umutekano) があるから平和 (amahoro) だ」と語るのを頻りに耳にしてきた。それらの語彙の、①政治的な文脈、②日常的な場面、③世代間での用いられ方の差異、を仔細に分析し、現代ルワンダで語られる「平和」が状況や文脈に応じて、どのような状態のものとして認識されているのかを解明する。

なお、2020年以降は新型コロナウイルス感染症の世界的な流行による影響を受けたため、本研究期間中に渡航できたのは、2020年3月9日～21日に限られた。当該期間には、それ以前に実施してきた(1)に関する補足的な調査を遂行するとともに、「国家の歴史」の主要な発信場所である首都キガリの虐殺記念館を訪問した。それ以降は、インターネット環境にあるルワンダ人の調査協力者には、一部、メールによる聞き取りをおこなった。予定していた現地調査が叶わなかったことから、戦後処理をめぐって「語ること」が重視されるに至った歴史的経緯の整理や、記

述者としての調査者がいかにかれらの記憶を分有し継承していくことができるのかという理論的展開に視点を移して研究をすすめた。

4. 研究成果

(1) 「大人世代の個別の記憶」に関する調査とその成果出版

上述の通り、2020年3月9日～21日にルワンダに渡航して、3(1)に関する調査をおこなった。首都キガリの虐殺記念館を訪問して、「国家の歴史」がいかに提示されているのかを確認するとともに、実際に体験した大人世代の人びとが、個々人のかけがえのない経験や記憶と「国家の歴史」とのあいだに生じる、衝突や緊張関係を回避したり調整したりしようとする実践を詳述して、かれらが相互におこなう静かな応答について積極的に評価した。

その成果を、国際シンポジウムで発表するとともに、その報告論文（『立命館大学生存学研究』, 2020）として掲載した。それ以外にも、複数の国際研究集会や国内研究会で発表した。

(2) 戦後処理をめぐる「語ること」の歴史的な経緯の整理とその成果出版

戦後処理において「語ること」に関心が向けられるようになったのは、比較的最近の出来事である。証言をはじめとする「語ること」への要請は、ナチス・ドイツのアイヒマン裁判を皮切りに、「正常な」民主主義への移行の試みや、トラウマをめぐる心理学的なセラピーの論理と相まって次第に高まっていった。そのことは他方で、過去の残虐行為についての人びとの沈黙を非合法で疑わしいもの、ないしは病的なものとしてきたことを、歴史的な経緯として整理した。

その成果を、分担執筆（*On the Social History of Persecution*, De Gruyter, 2023）として出版した。

(3) 調査者による暴力の記憶の分有に関する理論的展開とその成果出版

記憶論、および情動や沈黙、トラウマ等に関する先行研究を洗い出し、他地域にも視野を広げて極限的な状況下を生き抜いた人びとの民族誌を読み込むなかで、理論的な方向性を明確にすることを試みた。また、日本やアジアなどで暴力の記憶に関する研究をおこなっている研究者や実務家らとともに、国内にある博物館や資料館を訪問して、相互の問題関心に関する意見交換をおこなうことで、他者の計り知れない体験や記憶をいかに調査者が分有し、記述できるのかという根源的な問いに向き合った。

その成果を、分担執筆（『アフリカで学ぶ文化人類学』昭和堂, 2019）や短報（『MFE（多焦点拡張）』, 2020）などとして出版し、また国内の研究会で発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 近藤有希子	4. 巻 87
2. 論文標題 哀惜のけしき 中村哲先生の訃報に接して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『西南学院同窓会報』	6. 最初と最後の頁 11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 近藤有希子	4. 巻 創刊準備号
2. 論文標題 「未来は明日を生き抜くものに」 異邦人のチョコレートとルワンダからの退避について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『MFE（多焦点拡張）』	6. 最初と最後の頁 64-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 近藤有希子	4. 巻 4
2. 論文標題 沈黙する発話、情動する身体 ルワンダに生き残る暴力の記憶と痛みへの想像力	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『立命館大学生存学研究』	6. 最初と最後の頁 77 97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 近藤有希子	4. 巻 20 1
2. 論文標題 書評：鶴田綾『ジェノサイド再考 歴史のなかのルワンダ』名古屋大学出版会、2018年、 + 352頁	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『アジア・アフリカ地域研究』	6. 最初と最後の頁 152-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 近藤有希子
2. 発表標題 丘陵の再編—ルワンダ南西部における土地保有と貸借の実態—
3. 学会等名 生態人類学会第28回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 近藤有希子
2. 発表標題 慟哭を描くこと—ルワンダにおける暴力の記憶に対する被傷性と痛みへの想像力—
3. 学会等名 2022年度第2回国立民族学博物館共同研究会「被傷性の人類学 / 人間学」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kondo, Yukiko
2. 発表標題 'Never Do We Return to the Hill': The Army as Young Women 's Future in Contemporary Rwanda
3. 学会等名 The 8th Meeting, ILCAA-African Youths (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 近藤有希子
2. 発表標題 映画鑑賞会：記憶の場としての『ホテル・ルワンダ』
3. 学会等名 学生団体SHIRORU講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 近藤有希子
2. 発表標題 紛争後社会のフィールドワークルワンダで人びとの沈黙に会い直すまでー
3. 学会等名 日本ルワンダ学生会議講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kondo, Yukiko
2. 発表標題 Disposition of Grief, Apprehending Pain: Rwandan Citizenship Prescribed by the State and People ' s Morality
3. 学会等名 The 11th Iberian Conference on African Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 近藤有希子
2. 発表標題 アフリカの紛争後社会を生きる
3. 学会等名 京大大学生協同組合 X-academy 2022 第2回企画「知識との出逢い」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 近藤有希子
2. 発表標題 彼女たちの慟哭ールワンダ農村社会において情動が切り拓く道徳的秩序の再編成ー
3. 学会等名 2022年度IPCR研究会「共生的関係の発露をめぐる地域間比較研究ー東南アジアの境界域および紛争経験社会における移民・難民と身体に着目してー」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 近藤有希子
2. 発表標題 アフリカの紛争後社会を生きる
3. 学会等名 京都大学生協同組合 X-academy 2021 第1回企画「大学との出逢い」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 近藤有希子
2. 発表標題 未完の「和解」ールワンダ農村社会にみる情動が切り拓く道徳的秩序の再編成ー
3. 学会等名 研究会「紛争後社会の葛藤と沈黙ールワンダとウガンダにおける和解の可能性ー」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 近藤有希子
2. 発表標題 沈黙する発話、情動する身体ールワンダに生き残る暴力の記憶と痛みへの想像力ー
3. 学会等名 国際シンポジウム「共有できない平和/争いが移動する」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Kondo, Yukiko	4. 発行年 2023年
2. 出版社 De Gruyter	5. 総ページ数 300
3. 書名 Gerlach, Christian (ed.) On the Social History of Persecution ("From Her Wailing: Vulnerability to Memories of Violence and the Imaginations of Others' Suffering in Rural Rwanda" 担当)	

1. 著者名 近藤有希子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 270
3. 書名 松本尚之・佐川徹・石田慎一郎・大石高典・橋本茉莉（編）『アフリカで学ぶ文化人類学－民族誌がひらく世界－』（「紛争後社会－生き残りの悲しみ－」担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
スイス	University of Bern			